



Title	「しょうゆで考える資本主義的生産の成立」の授業プラン作成へ向けて
Author(s)	荒井, 真一
Citation	教授学の探究, 23, 171-200
Issue Date	2006-01-31
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/13667">https://hdl.handle.net/2115/13667</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	23_p171-200.pdf



# 「しょうゆで考える資本主義的生産の成立」の 授業プラン作成へ向けて

荒 井 眞 一

(北海道大学大学院教育学研究科博士課程)

## 目 次

はじめに

1. 「人間の本質規定」に根ざした歴史教育の構成へ向けて
  - 1.1 羽仁五郎「歴史教育」[1957・8]にみる経済概念の位置づけ
  - 1.2 有本良彦「社会科学の教育の目標と課題」[1979]にみる「人間の理解」
  - 1.3 須田勝彦「人間の本質規定」[2004]における「共同体性」
  - 1.4 アダム・スミスの著作にみる「同感」と「資本」の形成
    - 1.4.1 『道徳感情論』にみる「行為の適宜性」と「同感」
    - 1.4.2 『国富論』にみる「資本」の形成
    - 1.4.3 アダム・スミス理論の到達点と限界
2. 歴史教育実践における経済概念の検討
  - 2.1 『歴史地理教育』における経済概念
    - 2.1.1 農業生産を基礎とする教育実践
    - 2.1.2 商品流通を基礎とする教育実践
      - 2.1.2 若杉温「利根川水運と醤油醸造」[2001・2]・「近世の食文化」[2002・1]におけるしょうゆ醸造業・食文化の位置づけ
  - 2.2 山下恭「日本史教育と醤油」[1989]におけるしょうゆ醸造業の位置づけ
  - 2.3 本論におけるしょうゆ醸造業を基礎とした経済概念の位置づけ
    - 2.3.1 「歴史の全体像」把握のための方法
    - 2.3.2 食文化の採用による「人間の本質」への接近
3. 授業プランの理論的基礎
  - 3.1 授業プランにおける時期区分
  - 3.2 資本主義的生産の定義
  - 3.3 しょうゆ醸造業の有効性
  - 3.4 しょうゆ醸造業における生産と消費

おわりに

## は じ め に

[荒井-2004]において筆者は、しょうゆ醸造業における資本主義的な生産にかかわる教育内容を考察した。また、[荒井-2005]においては、歴史(社会科)教育における訓育的側面の基礎となることから、アダム・スミスの著作に依拠しつつ考察した。上記2論文の作成をふまえ、修士学位論文においては、[荒井-2004]に示された、生産を中心とした教育内容に、消費とい

う点からみたしょうゆ醸造業のありようについての考察を加えた。この考察により、17-19世紀(いわゆる「江戸時代」)における経済発展の過程を、しょうゆ醸造業の展開過程にあらわれる、人間の姿を基礎とする教育内容として、述べる事が可能となった。

本論においては、「日本における資本主義的生産の成立をどう教えるか」という課題へむけて、1つの到達点として、授業プランにおける理論的基礎の提示を行なう。この提示を行なうにあたり、筆者のめざす歴史教育についての考察と、いくつかの先行実践の検討をふまえた本論の位置づけの考察も、あわせて行なう。

## 1. 「人間の本質規定」に根ざした歴史教育の構成へ向けて

### 1.1 羽仁五郎「歴史教育」[1957・8]にみる経済概念の位置づけ

羽仁五郎は、歴史教育について、以下のような位置づけを行なっている。

歴史教育は、人間の社会の歴史的な動きの基礎をなすものが経済的關係であり、生産労働において人間が自然にたいし、また、人間相互のあいだに、いかなる關係をむすぶか、この生産關係を基礎としてあらゆる社会關係、政治、宗教、文化などが建設されていることを明らかにする。〔羽仁-1957・8〕p.89

上の記述を基礎に、考察を行ないたい。人間が行う生産労働によってつくられる経済的關係が、人間の社会の歴史的な動きにおける基礎となるということだろう。歴史教育について筆者は、1人1人の人間によってつくられる、社会のありようが主軸となるべきと考える。1人1人の人間によってつくられる社会のありようが、ひろく社会關係といった事柄につなげられてこそ、歴史は教育となりうる。

〔荒井-2004〕において筆者は、歴史教育における経済的な事柄を主たる教育内容とした。そして、経済的な事柄を担う具体的な業種として、しょうゆ醸造業を採用した。すなわち、しょうゆ醸造業を基礎とする経済的關係を、生産労働という点から、まとめたといえる。

ただし、〔羽仁-1957・8〕に示される経済的關係は、生産關係に限定されている。一方、須田勝彦は、人間の本質について考察する過程において、「自然存在としての人間、共同体で生産し、活動する人間の本質は、歴史的に形成された生産、分配消費のあり方に規定される」〔須田-2004〕p.79と述べている。人間の本質を規定するのが歴史的に形成された生産、分配消費のあり方であるならば、「経済」という語の意味するところは、生産關係に限定されるべきではないだろう。歴史教育は1人1人の人間によってつくられる社会のありようが主軸となるべきと(筆者が)考えるからである。それゆえ(筆者は)「経済」という語を、“生計を得るために行われる人間の活動の総体”と考えたい。このような「経済」を基礎にすえることによって、歴史教育は、それぞれの時代に生活を行っていた、人々のすがたを描きだす事が可能となる、と考える。

一方で須田は、教科の学習における「訓育的価値」にかんする考察の過程において、以下のような記述を行なっている。

子どもにとって教科の学習がつまらなるとすればそれはその子どもの人間性に触れ

るもの、訓育的価値がないからであり、また、徳目主義的徳徳がつまらないのは子どもが持っている科学や文化に関する知性と少しも共鳴しないからである。〔須田-2004〕 p.85)

上にしたがうならば、子どもの人間性に触れる教育内容を構成し教材とすることが、教科の学習を“おもしろい”ものにするために不可欠となる。「経済」を基礎にすえることで、歴史教育において人間の本質の具体例が提示可能となるならば、歴史教育は—「子どもの人間性に触れる」ことによって—“おもしろい”ものとなるはずである。

## 1.2 有本良彦「社会科学の教育の目標と課題」〔1979〕にみる「人間の理解」

有本良彦は、歴史を含む社会科教育の目標について、以下のように述べている。

目標について私見を述べれば、筆者は、社会科学の教育の重要な目標の1つは、人間の理解にあると思っている。人間の理解といってもさまざまであるが、ここでは、社会における人間の理解ということである<sup>1)</sup>。〔有本-1979〕 p.188)

有本によれば「社会科学の内容も、人間の理解にとって意味がある場合に有用なのであり、その点の意味が明らかでなければ価値が低いことになる」(p.188)という。では、人間の理解にとって意味がある教育内容は、どのように構成されるべきなのか。この疑問にたいしては、有本による、以下の記述が解答となるだろう。〔有本-1979〕 p.193)

社会における人間の理解という観点から、広く社会科学の成果を涉猟し、その内容を組みかえていく作業が必要であり、地理学や歴史学だけでなく、役立つものはどういう学問分野のものでも、どんな種類のものでも役立てなければならない。

上の意味するところは、遠山茂樹による、教育研究についての「歴史学の既成の成果によりかかり従属するのではなく、歴史教育研究の主体性を持つる」(〔遠山-1965・4〕p.8) べきとの主張にも、通ずるだろう<sup>2)</sup>。

さらに有本は、上記人間の理解によってめざされる、社会科教育の目的を、以下の記述によって示している。

単に科学の内容を身につけている人間を作るのではなく、基本的には、科学の内容を身につけていると同時に、社会の中で、自分の判断で、科学を主体的に用いることができ、同時に科学を自由に批判できる人間を育てることではなからうか。(p.196)

上記目的にたいしては、本論においても同意できる。それゆえ、上記“目的論”が、どのような“方法論”のもとに行われるのか、いにかえるならば“理解されるべき人間の姿はどのような論のもとで具体的に設定されるのか”との期待が増す。しかし、有本による「人間の一般的事実について、筆者は安易にその軽重の判断をしようとしてはならないと考える」(〔有本-1979〕 p.191)との記述にみられるように、この期待にたいする解答は与えられてはいないよう

である。一方で, [有本-1979] においては「社会科学ということばをさまざまな社会的現象についての科学的研究の総体の意味に理解すれば, その研究の内容は非常に多彩であり, またそれは次第に多彩化する」(p.185) との記述もなされている。この記述から判断するならば, 「さまざまな社会的現象についての科学的研究の総体」の中に, 「社会における人間の理解」が試みられた研究があるのではないか。

### 1.3 須田勝彦「人間の本質規定」[2004]における「共同体性」

須田勝彦は, 「北海道大学教授学研究グループの出発点を定め, またその後の関連諸科学の発展を含めた理論的整理を行なった」(p.77) とされる高村泰雄論文「教授学研究の方法論的諸問題(1)」を基礎として, 「人間の本質規定」にかんする考察を試みている([須田-2004] p.78-9)。須田によって示される「人間の本質規定」は, 以下の3点である。

- a. 人間は自然存在である。(p.78)
- b. 人間は共同体で生産し, 活動する。(同上)
- c. 人間は社会的・歴史的存在として自己を形成する。(p.79)

上記規定 c. にかんして, 須田は「自然存在としての人間, 共同体で生産し, 活動する人間の本質は, 歴史的に形成された生産, 分配消費のあり方に規定される。さらにそれを成り立たしめている社会制度, 慣習, 文化などに規定される。」(p.79) と述べている。歴史(社会科)教育において, 社会制度, 慣習, 文化などは, 主たる教育内容を構成するものである。須田の記述に従うなら, これら社会制度, 慣習, 文化などに規定されるのが生産, 分配消費のあり方である。そしてまたこれら生産, 分配消費のあり方に規定されるのが「自然存在としての人間, 共同体で生産し, 活動する人間の本質」ということになる。すなわち—歴史(社会科)教育における教育内容を構成する—社会制度, 慣習, 文化などは, 上記規定 a. および b. と, 密接にかかわるものと言える。[須田-2004] においても, 以下の記述により, 上記規定 b. と c. のかわりが示唆されている。

共同性は, 人間においては, 次の規定 c. と関わって組織的であり, そのあり方が世代間を越えて伝わるような社会的生産活動を作り出す。(p.78)

上記共同性(あるいは共同体性)にかんして, 須田は, 「人間の道徳性, 倫理の基本は共同体の維持・発展にその根拠を持っている」(p.79) と述べている。そしてこの「人間の道徳性, 倫理の基本」におけるもっとも本質的な内容は, 以下のものであるという。

自分の活動が他の人のよろこびとなることを自らのよろこびとする。他の人の活動が自分のよろこびとなることが他の人のよろこびとなる。このような情動, 目的意識が共同体を維持・発展させる原動力であり, この原理自体はいつの時代にあっても不変である。(同上)

上記原理が, 生産, 分配消費のあり方や社会制度, 慣習, 文化などと不可分な形で教えられ

るならば、前節に示した、有本による「社会における人間の理解」が、具体性をもって示されることになる。「共同体で生産し、活動する人間の本質は、歴史的に形成された生産、分配消費のあり方に規定される」のであるから、歴史的に形成された生産、分配消費のあり方にかんする「科学的研究の総体」の中から、「共同体で生産し、活動する人間の本質」が導き出されるのではないか。

#### 1.4 アダム・スミスの著作にみる「同感」と「資本」の形成

本節においては、アダム・スミスの著作に依拠しつつ、須田による「人間の本質規定」の、歴史(社会科)教育における位置づけを考察する。この考察を行なうにあたっては、[荒井-2005]における記述を基礎とする。

##### 1.4.1 『道徳感情論』にみる「行為の適宜性」と「同感」

『道徳感情論』の訳者である水田洋は、『道徳感情論』で考察の目標とされたことごとについて、以下の記述によりまとめている。

スミスがいつているのは、かれの問題が、行為や情念の社会的妥当性であって、それ自体としての善悪ではない ([水田-1973] p.536)

人間による行為の「社会的妥当性」を問題とするならば、その行為を規定する社会のありようにたいする理解を欠くことは出来なだろう。経済学者の内田義彦は、アダム・スミスが“経済学の父”と呼ばれるにいたった経過を、以下の記述によりまとめている。

(アダム・スミスは一荒井) 人間の学を有効に作りあげるため、経済に関心を持ち、さらに経済政策の学の流れの中にあつた経済学ともとりくんで、社会科学である経済学を、(中略)、作つた ([内田-1981] p.68)

社会のありようにたいする理解とともに、人間による行為の「社会的妥当性」を規定する原理も、求められる必要があるだろう。“どのような状況下にあつても人間は生活の向上を求める”というような原理が(例えば)導かれるならば、社会のありように影響を与えることはあきらかと思われるからである。水田は、『道徳感情論』で導かれた、「社会的妥当性」を規定する原理について、以下の記述によりまとめている。([水田-1973] p.537)

正義は、日常的な社会秩序であり、日常生活のなかで自然に成立する適宜性にほかならず、その適宜性を成立させるのは、見しらぬ人びとのあいだの同感であつた。

筆者は、上記「同感」にかんする概略を述べている([荒井-2005])。以下においては、[荒井-2005]における記述を基礎に、『道徳感情論』で導かれた「人間の道徳性、倫理の基本」の一例となる「同感」について考察したい。

『道徳感情論』第一部「行為の適宜性について」の第一篇「同感について」においては、「哀れみまたは同情」(p.5)にかんする考察がなされている。第一篇の内容に従うならば、「哀れみ

または同情」といった「受難にたいするわれわれの同胞感情をあらわす」ことばは、「同感」という語のもっとも固有で始原的な意味をあらわすに過ぎないという(『道徳感情論』p.62)。

『道徳感情論』第一部・第二篇<sup>3)</sup>・第一章「相互的同感の喜びについて」においては、以下の記述により、他者とのかかわりの中で得られる「同感」についての記述がなされている。

同感の原因がなんであろうとも、または、それがどれほどかきたてられようとも、われわれの胸のすべての情動について、他の人びとのなかに同胞感情を観察すること以上にわれわれを喜ばせるものはない。(『道徳感情論』p.14)

『道徳感情論』によれば、「かれ(主要当事者—荒井)の楽しみへの同感によって楽しまされることによって「かれの楽しみが、われわれ(観察者—荒井)自身のそれを活気づける」(p.15) ことが可能となるという。このような「相互的同感」について、内田義彦は「スミスが言う同感には、(中略)、同感しうる本能の他に、他人の同感を得たいという本能が含まれております」(〔内田-1981〕p.111, 傍点は原文による)との理解を示している。

また、『道徳感情論』第一部・第四篇<sup>4)</sup>・第一章<sup>5)</sup>においては、「歓喜にたいするわれわれの同感」こそが「真の同感」であり、「喜びをともにすることが人間本性の一原理である」(p.62)との記述がなされている。上記相互的同感と、人間本性の一原理である喜びをともにすることを考え合わせるならば、他の人びとのなかに歓喜という同胞感情を観察することが、「行為の適宜性」を決定づける要因となるだろう。前節須田による「自分の活動が他の人のよろこびとなることを自らのよろこびとする」との記述も、『道徳感情論』における記述に相応したものといえるだろう。身近な一例を挙げるなら、買い物などの折、ふと見かけた幼児に手などを振ったとき、手を振り返されたり微笑まれたりしたときのうれしきなどが、当てはまるのではないか。このような例から考えるに、人間本性の一原理である喜びをともにすることは、幼児にも適用されるものといえる。それゆえ同感とは、発達心理学などのような学問研究の成果を、教科教育における理論的基礎としてとり入れていくための“キーワード”となるのではないか。

須田によれば、人間の道徳性は「共同体の維持・発展」にその根拠を持っており、「古くからさまざまな言葉で語られてきている」(〔須田-2004〕p.79)という。人間本性の一原理から社会の機構への考察を試みたアダム・スミスの論は、さまざまな言葉の1つとして、検討する価値を有するものであると考える。

『道徳感情論』第一部・第四篇・第二章「野心の起源について、および諸身分の区別について」においてはさらに、「身分があり卓越した人は、世間全体から、見守られる」(p.74)ことの理由が、同感を基礎にして、以下のように述べられている。

あらゆる人がかれを見ることを渴望し、かれのおかれた状況がとうぜんにかれのなかにふきこむ、あの歓喜と勝ち誇りとを、少なくとも同感によって、心にえがくことを渴望する。(同上)

身分があり卓越した人に与えられるであろう、歓喜と勝ち誇りを心にえがくことを渴望するのであるから、この渴望の内容は、地位の上昇や境遇の改善であろう。これら地位の上昇や境遇の改善によって、いつかは(渴望の当事者自身も)世間全体からの同感を獲得したいと願う。

この願いにこそ、「野心の起源」があるといえるのではないか。内田による「共感<sup>9</sup>獲得本能と結びついた利己心(自己および自己の利害への関心—荒井)を、地位上昇の面でもとらえたのが野心です」([内田-1971] p.138)の記述も、同様な指摘だろう。

#### 1.4.2 『国富論』にみる「資本」の形成

『国富論』によれば、「人間<sup>7</sup>は仲間の助けをほとんどいつも必要としている」一方で、「その助けを仲間の博愛心にのみ期待してみても無駄である」(p.16)という。それゆえ、仲間の助けを求めようとする人間は、以下のような考えに到達するという。

もしかれが、自分に有利となるように仲間の自愛心を刺激することができ、そしてかれが仲間に求めていることを仲間がかれのためにすることが、仲間自身の利益にもなるのだということを、仲間に示すことができるなら、そのほうがずっと目的を達しやすい。(同上)

仲間の自愛心を刺激するとの記述は、前節における([内田-1971]による)共感獲得本能に通ずるだろう。また、仲間自身の利益との記述は、前節における利己心に通ずるだろう。それゆえ、上の記述は、『道徳感情論』における野心を基礎にしたものといえる。

上の記述のような考えに到達した「他人にある種の取引を申し出る」(同上)人間は、以下のような提案を行なうという。

私の欲しいものを下さい、そうすればあなたの望むこれをあげましょう、というのが、すべてのこういう申し出の意味なのであり、こういうふうにしてわれわれは、自分たちの必要としている他人の好意の大部分をたがいに受け取りあうのである。(同上)

すなわち、野心をもつ人間同士で、交換が行なわれることになる。『国富論』によれば、「交換という性向は人間の利己心によって刺激され、おのずから分業を生みだす」(p.17)という。このような分業が生み出される理由は、『国富論』における、以下の記述に示される。

人はだれでも、自分自身の労働の生産物のうち自分の消費を超える余剰部分を、他人の労働の生産物のうちかれが必要とする部分と交換することができるという確実性によって、特定の職業に専念するように促される。(同上)

ただし、『国富論』によれば、「市場の広さが分業の大きさを定め、とりわけ水上輸送によって市場は種々の産業に開放される」(p.19)という。すなわち、上記分業の確立のためには、市場の拡大が不可欠となる。

上記分業の確立後にかんして、『国富論』においては、以下のような記述がなされている。

分業が確立するとだれもが交換によって生活するようになるので、商業的社会が成立し、貨幣が発達する。(p.24)

上の記述に従うならば、貨幣の発達、分業確立後における商業的社會の成立の後に達成されることごとということになる。

貨幣の発達に伴い、多くの資産や財産を保有するものが現れるであろう。『国富論』によれば、「総資財には直接の消費にあてられる部分とそうでない部分とがあり、人がそれから収入を期待する後者は資本とよばれる」(p.261) という。そして、「資本が先行的にますます多く蓄積されるのに比例してのみ、労働もますます細分化」(p.259) されることになる。結果として、以下のような達成がなされる。

勤労の量は、すべての国において、それを用いる資本の増加とともに増加するばかりか、その増加の結果として、同一量の勤労から、はるかに多量の製品が生産される(同上)

『国富論』の冒頭においては、ピン作りの仕事が具体例としてあげられ、1人では1日に1本のピンを作ることが不可能な10人の職人たちが、分業により1日に約4万8千本以上のピンを製造した実例が紹介されている。(右図もあわせ p.4 より)

本節における以上の記述をまとめるならば、以下の図のようになる。

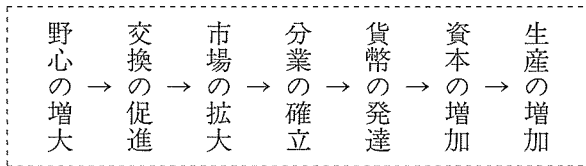


図 2: 『国富論』に示される「資本」形成の過程

『国富論』第 1 篇における記述をもとに筆者が作成したもの

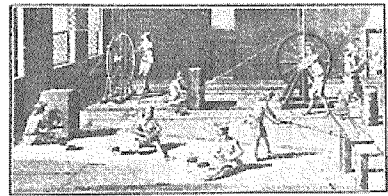


図 1: 『国富論』 p.4 に示される「マニファクチュア」

『国富論』においては、さらに、年生産物として表される「国民の資本」と「個人の資本」との関係が述べられている。以下に示せば、

一国民の状態を 2 つの異なった時期で比較してみると、その土地と労働の年々の生産物は、前の時期よりも後の時期のほうが明らかに大きいということ、またその土地はいっそうよく耕作され、その製造業はいっそう多数となり、いっそう繁栄し、またその商業はいっそう拡大しているということを見出すならば、(中略)、この国民の資本が、こうした 2 つの時期のあいだに増加したにちがいない (p.325)

「年生産物が増加した年は(国民の一荒井)資本が増加したと考えていい」(同上) といえるわけである。そして、このような「国民全体の資本は、ただの個人の資本と同じように、かれらが自分たちの収入のなかから貯蓄し、それをそのままたえず蓄積し資本に追加するという方法で増加される」(p.346) という。すなわち、「国民の資本」は「個人の資本」の総和として形成されるものといえる。

### 1.4.3 アダム・スミス理論の到達点と限界

『国富論』について内田は、以下のような評価を行なっている。([内田-1957・5] p.194)

『国富論』がモニュメンタルなのは、経済学のさいしょのワクを設定し、経済学の眼があって初めて社会と人間がよくみえてくることを示した点にある。

前節に示したように、アダム・スミスの論にしたがうことで、「同感」を基礎とした野心から「国民の資本」の増加へのつながりが、明らかにされた。しかし、社会と人間のかかわりについて、より広くとらえることが可能となる論の存在が、否定されるわけではない。それゆえ本節においては、アダム・スミス理論を批判的に考察し、より広く社会と人間のかかわりを考察するための足がかりとしたい。

注7)に記したように、『国富論』において考察の対象とされたのは「他人にある種の取引を申し出るもの」であった。このような人びとのもつ自己および自己の利害への関心を、地位上昇の面でとらえたのが、1.4.1に示した「野心」であった。この「野心」という語は、『道徳感情論』の原文においては、ambitionとあらわされている。また、このambitionという語には、『道徳感情論』において用いられる「野心」という意味のほかに、「向上心」「覇気」「大志」という意味も含まれている。すなわち、『道徳感情論』において用いられる「野心」は、「他人にある種の取引を申し出るもの」という限定がつけられたために、狭い意味で用いられているといえる。

アダム・スミスの論を、批判的に継承したといわれるのがマルクスである。1.4.2に示した分業にかんして、『資本論』においては、以下のように記述されている。

一般的原則として言えるのは、権威が社会内部の分業を支配することが少なければ少ないほど、作業場内部における分業はますます発達し、それはますます個人の権威に従属させられる、ということである。したがって、作業場における権威と社会における権威とは、分業に関する限り、互いに反比例する。(p.378)

上の記述に従うならば、社会における分業と作業場内における分業は、「権威」という点において、異なる特徴を持つといえる。一方で、『国富論』においては、1.3.2に示したピン製造の実例を述べるにあたって、以下のような記述がなされている。

社会全般の仕事にたいする分業の効果を比較的容易に理解するには、どれか特定の製造業をとって、そこで分業がどんなふうに行われているかを考察してみるのがよいだろう。(p.5)

上の記述から察するに、『国富論』においては、社会における分業と作業場内における分業は、異なった特徴を持つものとは思えない。それゆえ、『国富論』と『資本論』の記述は、分業の考察において、明確な違いを有するといえる。この分業の考察の違いについて内田は、「マルクスを置いてスミスを眺めてみると、また違った光景があらわれる」との記述に続き、以下のような記述を行なっている。

2つの分業を1つに統一するというやり方に問題が出てくるわけですね。第一、スミスの分析では人間が労働力商品になっているということの意味が鮮明にされていない。その面は完全に見失われているわけです。([内田-1988] p.440)

内田によれば「マルクスの場合、自由であるが無計画的・無政府的な一作業場の外で、商品交換に媒介される一社会内分業と、計画的だが、権力と服従の関係が存在する作業場内での分業の対抗的な性格を明らかに把握すること」([内田-1966] p.265 傍点は原文による)が、分業の考察における基本的な視角となるという。そして、このような対抗的な性格をはらみつつ、「過去の他人の労働の所産である資本が循環をくりかえしながら、無限に拡大してゆく」([内田-1966] 同上) ことになる。『資本論』における相対的剰余価値の生産(生産力の増大による必要労働時間の短縮のこと)といったことがら、『資本論』第1巻11, 12章において、作業場内における分業の効果として説明されている。『資本論』に従うならば、2つの分業は、対抗的な性格をもつものとして、考察される必要があるだろう。徳川幕府による「権威」が弱まったと考えられる、17-19世紀における、社会内部の分業の発展が、本論における教育内容の基礎となるからである。

ただし、上記考察によって、アダム・スミス理論のすべてが否定されはしない。内田は、アダム・スミス理論における歴史性について、以下のようにまとめている。

分業が資本主義社会の労働を特質づけるものとして、未開社会の孤立的労働とするべく対比的にとらえられているかぎり、彼の見方は「歴史的」であり、他方、社会的分業が、私的所有の基礎の上に、交換を通じて行なわれるものとして、すべて同一につかまえられているかぎり—つまり、交換による以外の社会的分業の存在がみとめられていないかぎり—、彼の文明社会概念は超歴史的である。([内田-1964・5] p.210)

社会における分業は、人間による歴史の当初から存在していたわけではないだろう。内田に従うならば、社会における分業が成立する過程にたいするアダム・スミスの理論は、歴史性を有するものといえるだろう。それゆえ、本論における教育内容の対象である、成立期における資本主義的な生産にかんする考察において、アダム・スミスの理論は有効性をもつだろう。

## 2. 歴史教育実践における経済概念の検討

### 2.1 『歴史地理教育』における経済概念

本節においては、歴史教育者協議会(以下歴教協とする)による機関紙『歴史地理教育』における経済概念の取り扱いについて検討する。本論の対象とする時期が17-19世紀のいわゆる「江戸時代」であるので、検討の対象とする時期も17-19世紀の日本史指導に限定する。

歴教協においては、年に1度全国大会が開催され、分科会討議が行なわれる。17-19世紀の日本史指導を目標とする分科会は、「日本前近代分科会」である。1991年の分科会報告に「地域史と全体像をどう統一させるかという問題が出され」([永瀬-1991・10 臨] p.52) とあるように、上記分科会においては、地域史と全体像の統一ということがらが、大きな課題となっていた。前章において述べた“経済を基礎にすえること”という(筆者の)主張も、この地域史と全体像の統一と無関係ではない。羽仁五郎が述べたように、“経済を基礎にすえること”により、「あ

らゆる社会関係」を含むことが可能となると考えるからである。それゆえ、『歴史地理教育』における経済概念の取り扱いについての検討を通して、地域史と全体像の統一がいかに達成されるかを考察することが、本論第2章における大きな課題となる。

### 2.1.1 農業生産を基礎とする教育実践

和久田薫は、以下の方法により、地域史と全体像の統一を目指したという。

地方史と全体史をつなぐ環—媒介環を年貢のゆくえという「商品流通」に求めたのである。（〔和久田-1985・12 臨〕 p.69）

「宮津藩と農民」を題名とする実践において和久田は、「農民が不安で緊張した『検見の日』」（同上）を再現したという。そして、この再現の過程で「役人の測量のようすや、農民たちがひもの境の稲を外に出したり、ゆすって柵の配数を減らすなど、知恵を働かせて実りぐあいを悪くみせかけたことなどを興味深く話してやる。」（同上）ことなどを行なったという。〔荒井-2005〕において述べられたような“農民にたいする同感”が生徒に生じるならば、そこから「人間の本性」が導き出される可能性はある。その可能性という点において和久田は、「人間の本性」に近づくことが可能であったといえるだろう。

しかし、以下の記述にたいしては、疑問がある。

地域学習を江戸時代学習のどこに入れるかについても私自身にまよいがあり、少し地域のことがふくらみすぎているのではないかという心配もある。（p.73）

地方史と全体史をつなぐことが可能になっているなら、上の記述にみられるような心配は不要ではないか。地方史が全体史とつながっているなら、どこに入れるかはおのずと明らかとなるだろうし、地域のことがふくらみすぎることもないだろう。年貢のゆくえが完全に明らかになるなら、大坂や江戸の米問屋を経て様々な人々に米の行きわたるさまが明らかになるはずである。このとき地方史と全体史をつなぐことは可能となるはずである。

批判的な論を展開することになったが、商品流通に「媒介環」を求めた点において、参考となる点は大きい。

また、西野護は、以下のような問題意識を表明している。

いつの時代でも民衆は抑圧を受け、差別され、利用されたという歴史意識を育てるということのでいいのだろうか。（〔西野-1988・6〕 p.32）

西野によれば「（18世紀以降—荒井）を高める願いと努力のなかで、農民は農具を発明・改良し、用水を掘り、新田を開き、米の増産を実現してきた」（p.34）という。また、「商品作物を栽培し、加工し、販売するといった農民も登場する」（同上）という。このような事実を踏まえた上で、西野は「知恵と努力で生産と生活を高めていった農民像を生き生きととらえさせたい」（同上）との目標を示している。

「江戸時代の農民像をどう描くか」を題名とする、西野による実践の独自性は、「中期農民像

の典型」(p.34) がとり上げられている点にある。この「中期農民像」とは「増産や商品自由売買に干渉し、年貢増徴策や農民的商品生産を捕捉しようとする幕府や藩とたたかう農民像」(同上) であるという。このような中期農民像の典型がとり上げられることによって、西野による実践は、以下のような具体性をもつこととなるという。

農民の闘争を、(中略)、生産と暮らしを守り広げる積極的な内容をもった闘争であったととらえさせ、イメージ化させたい。(同上)

〔西野-1988・6〕によれば、授業後においては、以下のような感想文がみられたという。

ほとんどの感想文は、農民の生産と生活を高める努力を「えらい」「がんばった」「かしこい」等と共感をもってとらえている。(p.39)

上記感想をみるにつけても、西野による授業が、成功に終わったことは疑いない。しかし、「江戸時代の農民像をどう描くか」のようなすぐれた授業実践をみるほどに、歴教協にたいして、大きな不満が膨らむ。その不満とは、このようなすぐれた実践のいくつかを“つないでゆく”という作業の行なわれた形跡が、『歴史地理教育』をみる限り、感じられないことである。

たとえば、糸乗政治『千歯こき』で変わった江戸時代の農民』においては、『農業全書』や『農具便利論』といった史料価値の高い文献を基礎に、以下のような内容が示されている。

- (1) 千歯こきの発明は、農業生産に革命をもたらした(技術革新)
- (3) 農具の改良、栽培法の研究など農業研究が進み、農書(『百姓伝記』『会津農書』『農具便利論』等)が普及した。
- (4) 稲作だけでなく、商品作物(綿・菜種・あい等)の栽培により、農業経営(本百姓の自立)や生活がいっそう進んだ。(p.49)

上の記述に示されたような技術革新が、西野実践における「中期農民像の典型」と連続して教えられるならば、生徒の「イメージ化」はより進むのではないか。

また、土産田真喜男によれば「木綿の栽培の発展は、それに関連する他の商品生産も活発化させた」(〔土産田-1992・3 臨〕 p.77) という。この関連する他の商品生産の例が「藍作と干鰯である」(p.77) という。〔土産田-1992・3 臨〕によれば上記商品生産の活発化により、以下のような展開がみられたという。

木綿は社会的分業関係やその周辺産業の発達を促進し、様々な分野で活躍する人々の存在を実現させた。(同上)

さらに述べるなら、平井敦子による、以下の記述も付け加えられてよいだろう。

農民が買い込んだ肥料が「蝦夷地のアイヌ労働者が作り出したメ粕」で、このために生産が向上したという記述からは、幕藩体制を支えた生産力の根底に蝦夷地・アイ

ヌ民族の存在を見ることができる。([平井-1998・9] p.48)

本節において示した4つの文献を、以下のようにつなぐことによって、生徒の「イメージ化」はより進むのではないか。

農業技術の進歩 → 木綿などの生産の拡大 → 魚肥の大量使用  
→ 社会的分業の拡大 → 中期農民像の形成

図3：「歴史地理教育」における実践のつながり

[西野-1988・6]・[糸乗-1992・9]・[土産田-1992・3 臨]・[平井-1998・9] の記述をもとに筆者が作成したもの

平井の示した「蝦夷地のアイヌ労働者が作り出したメ粕」は、社会的分業の一翼として、地域史を担うものとなるだろう。これら分業の結果として「中期農民像の形成」が「イメージ化」可能となるならば、図3のような指導の過程を経て、地域史と全体史は統一可能となるのではないだろうか。

### 2.1.2 商品流通を基礎とする教育実践

小島一仁による実践の舞台となった千葉県佐倉市は「利根川下流南岸にある人口5万足らずの町である」([小島-1979・10] p.22) という。小島によれば、以下のような事情を経て、佐倉の経済は大いに発展したという。

江戸時代に入って、利根川の流路が東方につけかえられると、佐原は利根川・江戸川の水運で江戸と直結することになり、これが商業発展の大きな刺激となったようである。(p.23)

小島によれば、上記過程を経て、18世紀後半には「醸造を行なう家が30軒以上になり、佐原の酒や醤油は、近隣の農村ばかりでなく、高瀬舟で江戸へつみ出されるようになった」(同上) という。前章における「市場の広さが分業の大きさを定め、とりわけ水上輸送によって市場は種々の産業に開放される」との『国富論』の記述にも通ずるだろう。水運の重要性が知らされる記述である。

水運の重要性について、少々考察を加えたい。18世紀後半に大都市となっていた江戸とつながることで、商業が大きく発展することは間違いないだろう。しかし、江戸が大都市であるならば、その影響力の大きさは、他の地域にもおよんだであろう。また、水路が通っているならば、江戸からそれぞれの地域への物資の移動や、さまざまな物資の結合による新たな商品の開発などといった事柄も、みられたとは言えないか。

上の疑問にたいする解答の1つは、尾河直太郎によって与えられる。以下に示せば、

川越から江戸への舟は、芋、米、材木、薪炭、野菜などを乗せているが、江戸から川越へは、砂糖、古金物、古着、糠<sup>ぬか</sup>などが送られている。([尾河-1982・9] p.18)

上の記述をまとめるならば「江戸は単純な消費都市ではなく、商品流通の中継地であり、農村の生産の原材料の供給地でもあった」(同上)ということになる。すなわち、[小島-1979・10]と[尾河-1982・9]における「佐倉と川越にかんする」記述は、江戸への水運という点において、統一される。前節における記述と同様に、いくつかの実践を組み合わせるにより、地域史と全体史は統一可能となるのではないだろうか。またさらに、[小島-1979・10]と[尾河-1982・9]の2者によって示される内容に加え、上段に述べた“さまざまな物資の結合”の具体例が示されるならば、地域史と全体史の統一はより強固なものとなるだろう。

### 2.1.3 若杉温「利根川水運と醤油醸造」[2001・2]・「近世の食文化」[2002・1]における しょうゆ醸造業・食文化の位置づけ

若杉温によれば、「行徳の塩、銚子・野田の醤油、佐原の酒、流山の味醂<sup>みりん</sup>など有名な産業はすべて下総で、しかもほとんどが利根川流域である」([若杉-2001・2] p.64)という。そして若杉は、このような事実から「江戸と房総を結ぶ利根川水運が、いかに房総の産業に深く結びついていたか」(同上)が示されるとも、述べている。これらの記述を踏まえた上で若杉は、以下のような構想が示している。

なぜ利根川流域に醤油醸造の特産地が集中したのか、なぜ関東醤油は関西醤油との競争に勝利できたのかという2つの問題をテーマに、授業の展開を考えてみたい。(同上)

上の記述から察する限り、若杉によってとり上げられるしょうゆ醸造業の展開は、利根川流域に位置する、房総地域に限定されているようである。大消費地であった江戸に中心的に供給を行ったのが、房総地域であることは確かであろう。しかし、しょうゆ醸造業の展開の過程から学ぶことは、江戸を中心とした経済圏に限定されるものとは思われない。生産の広がりという観点からしょうゆ醸造業の展開を述べるならば、より包括的な形で、19世紀における経済の展開を考察することが「生徒たちに」可能となるように思われるのである。同様な指摘は、加藤公明による、以下の分科会報告にも示されているようである。

討議では、近世後期における関東醤油の江戸市場独占の実現を、利根川流域の地域的な問題として考えるだけでなく、ひろく全国的な視野で捉えさせる必要があるなどが指摘された。([加藤-2000・10 臨] p.40)

ただし、若杉によって述べられた「日本的な食文化」(p.65)の形成という事柄には、参考とするべきものがある。[若杉-2001・2]によれば、数多くの食物のうち「蕎麦の消費で醤油需要は大きく伸びたとされている」(同上)という。身近なもののかかわりで歴史を捉えようという問題意識には、見習うべき点が多いであろう。

上記若杉による問題意識は、[若杉-2002・1]([『歴史地理教育』所収「近世の食文化」])において反映されている。若杉によれば「各時代の産業について説明をした部分でも、生産・流通の記述は豊富だが、消費についてはほとんど触れていない」([若杉-2002・1] p.20)という。この記述をふまえ、若杉は、以下のような問題提起を行なっている。

なぜ一番身近で生命維持に不可欠である食について、生徒の関心も高いにもかかわらず、教科書に記述されることが少なく、授業でもあまり取り上げないのか、疑問といわざるをえない。(p.20)

[若杉-2002・1]によれば、近世の食文化を知ることで「庶民性を大きな特色とする近世文化について学ぶことができる」(同上)という。この庶民性の具体例は、以下の言によって示される。

関西からの移住者が多い江戸初期にはうどん屋が多く、東国や江戸生まれの者が増えるに従って、そば屋が増えていったと考えられる。(p.22)

現在のような握りずしが発明されたのは近世後半の文政期(1818-30—荒井)で、それまでは関西と同じく押しずしがつくられていた。(同上)

上記2つの記述は、[荒井-2004]において述べられた、下りしょうゆの減少およびしょうゆ醸造業における資本主義的な生産の形成という、しょうゆ醸造業の展開過程に対応している可能性が大きい。[若杉-2001・2]においては、「100万人とされる人口を養うためには膨大な食料が必要とされ、そこから寿司、天ぷら、蕎麦、蒲焼などの日本的な食文化が形成されたというが、これに欠かせないものが醤油であった」(p.65)との記述がなされている。これに依拠するならば、[荒井-2004]に述べられた、しょうゆ醸造業における“生産”の過程は、日本的な食文化という“消費”の過程としても、説明可能となるはずである。

[若杉-2001・2]または[若杉-2002・1]において、そのような“生産と消費をつなぐ”実践が行なわれているならば、本論におけるもくろみは水泡に帰する。しかし、[若杉-2001・2]または[若杉-2002・1]においては、これら両文献の対応関係が述べられてはいない。それゆえ、“生産と消費をつなぐ”試みは、未だなされてはいないことになる。

また、“消費”についての考察を掘り下げたならば、その考察からは“おいしいものを食べた”という、人間誰しもがもつ本性が導き出されるはずである。[荒井-2005]において述べられた「同感」が、社会の基礎に位置づけられる可能性がうまれるのではないか。

## 2.2 山下恭「日本史教育と醤油」[1989]におけるしょうゆ醸造業の位置づけ

山下論文の収められた『日本史教育に生きる感性と情緒』(教育出版[1989])は、「社会史」と呼ばれる学問分野の研究成果に依拠した著作である。上記著作において星村平和は、この「社会史」における問題意識を、以下の記述に集約している。

歴史学の対象とする歴史事実は、非日常性に基づいて成り立っているという前提があった。そのことが、現在の歴史研究を一種の閉塞状況に追いやっている誘引ともなっている。歴史学が、長い研究の蓄積があるにも拘らず、政治・経済・法律・社会関係といった分野別にしか人間活動の有様をおさえることができなくなっていると指摘されているのも、1つにはここに問題があるといえよう。([星村-1989] p.27)

上記閉塞状況を脱するための方法は、上記著作における、河内雅雄による以下の記述によって示される。

各時代にあってそれぞれの個性豊かな地域と風土を舞台に暮らす人々の生きざまに着目し、彼らがいかに日々を送り、そのなかで喜怒哀楽を表し、基層的な生活文化を培っていたか、このような部分に切り込み、それらの総体として歴史像を鮮やかに描き出すことが、今日的課題の1つとしてあげられるであろう。([河内-1989] p.39)

人々の生きざまに着目し基層的な生活文化に迫ろうとの試みには、新鮮さが感じられる。しかし、以下の言から察するに、実践検討の対象である[山下-1989]において、このような「人々の生きざま」に着目することが行われてはいないようである。

日本史の中で醤油を取り扱う場合、ふつう醤油醸造業として取り扱う場合が多い。現在の醤油に関する歴史的研究が、醤油そのもののルーツを探るといよりは、むしろ醤油醸造業として経済史、経営史、流通史、技術史の側面から行われているからだ。本稿もこうした研究成果をもとに醤油醸造業の観点から論ずるものである。(p.187)

しょうゆ醸造業の観点から論ずるという点は、[荒井-2004]と同一である。それゆえ、[山下-1989]において示される内容は、[荒井-2004]における内容と類似している可能性がある。

[山下-1989]においては、「教材化への提言」として、以下4つの「時代設定」がなされている。(pp.191-2)

① 元禄期前後(17世紀末～18世紀初頭)

この時期は各地で醤油醸造業が勃興し、大都市への出荷が始まり、商品としての地位を醤油が築く時期でもある。

② 天明期前後(18世紀後半)

関西・関東ではほぼ時を同じくして「醤油仲間」結成の動きが出てくる。

③ 化政文化期(19世紀前期)

この時期は醤油の消費量が全国的に伸び、各地の醸造地が全国的な名声を得てくる時期である。

④ 天保期～幕末(19世紀中頃)

この時期では、まず天保の大飢饉(1833-36—荒井)と関連づけて関東醤油を取り扱うことができる。またこの時期、醤油の大消費地であった江戸から急速に関西醤油が姿を消す。

上記4つの「時代設定」のうち、①から③は、[荒井-2004]における内容とほぼ同一といえる。しかし、④にかんしては、篠田壽夫による「文政4(1821)年、十組醤油酢問屋行事の上申によれば、1ヵ年江戸入津量が125万樽に達しており、うち123万樽までが関東7国からであるという」([篠田-1989] p.59)との記述に従うならば、「江戸から急速に関西醤油が姿を消す」との記述は③に該当する。また、林玲子は、「安政3(1856)年の江戸には醤油156万5千樽が入荷したが、このうち上方からの下り醤油は9万樽にすぎず」([林-1986] p.239)と述べている。篠田および林による両記述を考え合わせると、1821-56年の期間において、江戸へのしょうゆの入荷量は123万樽から156万5千樽に増加している。一時的な減少はあったかも知れぬが、「総体」

として消費量は増加しているだろう。

上記考察を踏まえるならば、時代設定の④は、③に含まれるべきである。ただし、文献作成が1989年(あるいはそれ以前)であることを考えるならば、学問研究における成果の(2004年と比較したときの)不足という、制約はやむをえない。

しかし、山下による記述からは、[荒井-2004]においては見られなかった、「社会史」における問題意識が反映された記述が見られる。山下によれば、上記③の時期の指導における注意点として、以下の事柄があげられるという。

この時期の醸造業の発展は、化政文化と関連づけて取り扱うことが重要である。当時、特権階級の食べ物も庶民にも広がり、多様な料理(例えば「すし」「そば」など)が普及し、調味料としての醤油の価値は高まったと考えられる。([山下-1989] p.192)

また、文献末部においても「食文化の変化と醤油業の発展とはどんな関係があるのだろうか」(p.194)との疑問が示されている。前節に述べられた、「生産と消費」の対応という、問題意識と通ずるであろう。

## 2.3 本論におけるしょうゆ醸造業を基礎とした経済概念の位置づけ

### 2.3.1 「歴史の全体像」把握のための方法

歴教協においては、80年以降、地域史と全体史をつなぐことの重要性が、叫ばれ続けた。北海道歴教協による「北海道史」の試みのように、実践という形での地域史と全体史をつなぐ試みは、今なお行われ続けている<sup>8)</sup>。しかし、歴史の全体像を構築するための鍵ともいべき概念の考察が、求められるだろう。

本論2.1.3において述べたように、たとえば、[小島-1979・10]と[尾河-1982・9]における一佐倉と川越にかんする一記述は、江戸への水運という点において、統一される。また、[荒井-2004]と共通する課題が論じられる[若杉-2001・2]においても、利根川水運としょうゆ醸造のかかわりが論じられている。

[若杉-2001・2]においてとりあげられるしょうゆ醸造業の展開は、利根川流域に位置する房総地域に限定されていた。しかし、学問研究の成果をさらにとり入れることにより、利根川流域における農業・商品生産・流通の発展はより深められ、しょうゆ醸造業の展開はより広範囲の地域を把握することが可能となるのではないか。[荒井-2004]においてとりあげられた教育内容は、このような学問研究の成果が、(しょうゆ醸造業にかんする限り)反映されている。[荒井-2004]における記述に、なされるべき補足がなされるならば、歴史の全体像の構築に一定の成果が得られるだろう。

[荒井-2005]執筆の後、筆者は修士論文を作成した。修士論文の中では、17-19世紀の「江戸時代」における「資本」形成の(いくつかの業種における)ありようをまとめた。これらを表にまとめたものが、次ページ表1である。

表1から察するに、17-19世紀における「国民の資本」の形成過程を、もっとも明確に反映しているのがしょうゆ醸造業である。しかし、しょうゆ醸造業における発展過程を概観することのみでは、17-19世紀にみられた「国民の資本」の形成過程における、全体像を知ることはできないだろう。

表 1 : 生産からみた「資本」の形成

[荒井-2004] における記述を基礎に, 修士学位論文において作成したもの

[岡崎-1999] における区分	[荒井-2004] において示された経済の展開	[荒井-2004] において示されたしょうゆ醸造業の展開	しょうゆ醸造業以外の農業・工業		
岡崎による区分は人口を基礎にしたもの	・「大名領国制」下の農業生産力の上昇 ・都市を基礎とする経済発展	・みそから分化し, 独立した調味料となる …京都, 湯浅	<b>米作</b> ・沖積平野での栽培が始まる	<b>綿花</b> ・栽培始まる。	<b>その他</b>
17世紀	高成長	・「下りしょうゆ」が江戸に送られる。	・石高が飛躍的に増大する。 ・集散市場として大坂が繁栄する。	・畿内における綿作の発展	・畿内における製油業の発展 ・魚肥としての鰯
18世紀	停滞	・関東しょうゆの江戸進出。 ・大坂の地位の相対的低下と問屋商人による市場支配 ・関東しょうゆの仲間結成と, 銚子・野田の争い	・土地生産性の上昇のもとで停滞。	・綿作が全国に普及 ・問屋制家内工業の展開	や鰯の漁獲がさかんになる。 ・製紙業がさかんになる。 ・藩専売が見られる。
19世紀	緩やかな成長	・大坂の地位低下と野田優位の確立 ・問屋商人の支配力低下 ・農村市場形成による二層構造の形成		・藩専売の展開	・特産品を基礎とした藩専売が多く見られる。
19世紀中盤以降		・二層構造の拡大再生産 ・資本供給の点で近代工業化にリンク		・外国製品に圧倒される。	

表 1 に示されるように, しょうゆ醸造業以外の業種においても, 限定的ながら「国民の資本」の形成過程は反映されている。というよりもむしろ, 限定的な形で, 特定の時期における「国民の資本」の形成を担っているといえるだろう。たとえば稲作においては, 17 世紀における, 高成長や全国市場形成の動きが反映されている。また, 18 世紀における漁業の発展に目を向けるならば, 土地生産性の上昇による商品作物の栽培は, 同時期にみられた魚肥の普及に負うところが大きいのである。

本節において強調されるべきことは, しょうゆ醸造業に象徴的に示される「国民の資本」の形成過程は, 他の業種とのかかわりの中で考察される必要があるということである。『国富論』の記述によれば, 貨幣の発達, 分業確立後における商業的社会的成立の後に達成されることながらであった。この考えに従うならば, 社会における分業の確立なくして, しょうゆ醸造業の

発展(資本主義的な生産)も起こりえないことになるのである。

### 2.3.2 食文化の採用による「人間の本質」への接近

[若杉-2002・1]においては、「なぜ一番身近で生命維持に不可欠である食について、生徒の関心も高いにもかかわらず、教科書に記述されることが少なく、授業でもあまり取り上げないのか」との問題意識が示されていた。このような問題意識が踏まえられた後、[若杉-2002・1]においては、「近世の食文化」を知ることで「庶民性を大きな特色とする近世文化について学ぶ」との“戦略”が示された。しかし、この“戦略”の具体化と思われる、“生産と消費をつなぐ”試みは、なされてはいない。

河内雅雄によれば、「社会史」と呼ばれる学問分野は、人々の生きざまに着目し基層的な生活文化に迫ろうとの試みを行う分野であった。そしてこの「社会史」のひとつには、「食物史」と呼ばれる分野も存在する。この「食物史」における研究成果から、人々の生きざまが導き出されるならば、“生産”を主軸とする[荒井-2004]における教育内容に、“消費”という人々の生きざまを、“つなぐ”ことが可能となるのではないか。

「食物史」における研究者である原田信夫は、食料の消費ということがらと社会における生産構造とのかかわりについて、以下のような問題意識を示している。

とくに古い時代にあっては、社会の骨格をなす生産構造の在り方が、それぞれの時代の主要な食料の消費と、実際には密接に関連していたにも関わらず、その関係についてはほとんど論じられてこなかった。([原田-1995] p.1)

原田によれば、「歴史とは過去の人間の活動の総体である」([原田-1995]p.12)という。それゆえに、「その(人間の活動の一荒井)基礎となる食料の獲得と分配とが、大きく社会を規定したはずで、食生活が歴史に占めた位置は非常に重要であった」(同上)との論が導かれる。[原田-1995]における論に従うならば、消費としての食生活のありようを(史料等に基づいて)詳しく調べることにより、社会を規定したであろう要因が見つげ出される可能性がある。

上に述べたような“社会を規定する要因”を、食物を消費する側から考察することが、歴史教育に食生活を取り入れることによって可能となるだろう。

また原田は、須田の述べる「共同体性」に通ずる考察も行なっている。原田によれば、食生活のありようを知ることによって、(上に述べられた社会を「規定」する要因の他に)以下のような事柄も考察可能になるといふ。

共同で行なう食事には、食物の供給という本来の目的のほかに、同じものを同じ場所で同時に食する行為を通して、人間としての共同性を確認する、という意味が込められている。([原田-1995] p.14)

原田によれば、「同じ釜の飯を食う」という言葉は、「共食によって、経験の共有もしくは無言の誓約、という確認を行なったこと」([原田-1995]p.15)をあらわすという。アダム・スミスの言を借りるならば、このような共食は、お互いが同一の経験を共有することによって喜びを感じるといふ「相互的同感」を、具体的に表現したものといえるであろう。もし、この共食が

とても楽しいものであるならば, その場において得られる「同感」は, 「真の同感」とさえ言われる「歓喜にたいする同感」となる。“おいしさ”という事柄は, 共食の“楽しさ”を構成する1つとなるであろう。“みんなでまたおいしいものを食べたいね”という願いがかなえられるような社会の実現した(し始めた)時代のありようが, “おいしいもの”の具体例とともに述べられるならば, 現代の我々にとっても「同感」可能な「過去の人間の活動の総体」が導かれるであろう。すなわち, 「食物史」によって明らかにされる人々の生きざまから, 「同感」を基礎とした人間の本性が, 導き出される可能性がある。[若杉-2002・1]における「一番身近で生命維持に不可欠である食」との記述が, この可能性を下支えしていると思われる。

消費という点から見ると, [荒井-2004]にたいするなされるべき補足は, “生産と消費をつなぐ”試みにより, 「同感」を基礎とした人間の本性を教育内容にとり入れることである, といえるだろう。

下記の表 2 は, 表 1 と同じく, 修士論文において(筆者が)作成したものである。消費として

表 2 : 消費からみた「資本」の形成  
修士学位論文において作成されたもの

食生活の概要	料理の具体例		
	そば・天ぷら	すし・刺身	うなぎ
<ul style="list-style-type: none"> <li>・武士層の需要により, 日本料理の基礎が確立</li> <li>…しょうゆ, 砂糖, 酒, 昆布の使用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・うどんの原型が出来上がる</li> <li>・西洋料理としての天ぷら伝播</li> <li>・兵食用としての鰯の重用</li> <li>・そば切りの誕生</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・米を食用とする「ナマナレ」の登場</li> <li>・鱈から刺身が分化</li> </ul>	
<p>17世紀</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・巨大都市江戸の誕生による消費の拡大</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>…蒸しそばとして出される</li> <li>・「けんどんうどん」と「けんどんそば」が登場する。</li> <li>・夜蕎麦売が登場する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上方の押ずしが江戸で売られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・うなぎの蒲焼きが江戸に伝わる。</li> </ul>
<p>18世紀</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・江戸における振売りや外食店の増加</li> <li>・農村における, 食生活の向上と, 祝宴における共色</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そばがうどんを逆転する。</li> <li>…ブランド化, 新そば, 年末のそば, 風鈴そば</li> <li>・天ぷらの普及</li> <li>・カツオブシの進化と流通経路の確立</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・早ずし(棒ずし, 巻きずし)が登場する。</li> <li>・料理屋で刺身が出されるようになる。</li> <li>…漁業の発達</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・蒸しの技術が江戸で考案される。</li> </ul>
<p>19世紀</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・江戸における飲食店の急増</li> <li>・農村における料理書の普及, ハレの日の食事の変化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・江戸に4000店のそば店ができる…更なるブランド化</li> <li>・種物の増加…天ぷらそば</li> <li>・そば店での交流</li> <li>・ハレの日のそば食</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・握りずしの誕生, そして急速な普及</li> <li>…酢の大量生産</li> <li>…屋台の盛況</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・うなぎ丼の登場</li> <li>…良質なみりんの登場</li> <li>…割り箸の使用</li> </ul>
<p>19世紀中盤以降</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・和食を基礎とした肉食普及</li> <li>・外食機会の増大, 店舗の大衆化</li> </ul>			

の食生活に目をむけると、表2から明らかなように、しょうゆ醸造業の展開過程がもっとも明確に反映されている料理はそばである。一杯のそばには必ず一定量のしょうゆが用いられるだろうから、そば食の発展がしょうゆ醸造業の発展を反映するのは当然だろう。しょうゆ醸造業において大量生産が達成され、江戸にそば屋が4,000店つくられたとき、はじめて(商品としての)天ぷらそばが登場する。それゆえ、天ぷらそばは、しょうゆ醸造業における大量生産の成果といえる。

ただし、天ぷらそばにいたるそば食の発展を考えるにあたって、考察の対象がしょうゆ醸造業に限定されることは許されない。なぜなら、前節で述べたように、社会内の分業が達成されることにより、はじめて天ぷらそばが完成されているからである。すなわち、天ぷらそばが生まれるためには、しょうゆ以外にも漁業(えびや鰹)、製油業の発達が不可欠なのである。そして、このような社会内の分業による消費拡大の基底には、“よりおいしいものを食べたい”あるいは“おいしいものをみんなで食べたい”という人間の本性が内在しているだろう。

以上を考えるならば、「国民の資本」の形成過程がしょうゆ醸造業に典型的に反映される一方で、そのしょうゆ醸造業の展開過程がもっとも明確に反映されたそばにおいては、社会内における分業がとらえられるわけである。すなわち、(しょうゆの)生産における量的な増大と(そばを媒介とした)他業種へのひろがり、人間の本性を基礎にするものとして、統一的にとらえられるといえるだろう。

### 3. 授業プランの理論的基礎

#### 3.1 授業プランにおける時期区分

[荒井-2004]においては、岡崎哲二による時期区分が採用された。以下に示せば、

高成長(17世紀～18世紀初め)、停滞(18世紀初め～18世紀末)、緩やかな成長(18世紀末～19世紀)という3つの局面が存在したことがほぼ明らか ([岡崎-1999] p.41)

岡崎による上記時期区分は、耕地面積と、人口の推移の比較から導かれたものである。岡崎によれば「人口と耕地面積の動きは経済成長率のマクロ的推計の結果と整合する」([岡崎-1999] p.40) という。岡崎によって示される表2-1([岡崎-1999] p.39)をみるかぎり、人口と耕地面積の動きは一致する。しかし、「停滞」とされる18世紀末における農業生産高の数値にかんして、1750年と1800年の間のものが示されていない。農業生産高が増大しているならば、「停滞」との表現は、やや不適切となるので、再検討を行なう。

岡崎によって示される表2-1は、宮本又朗([宮本-1988] p.44)による記述に依拠し、作成されたものである。「実収生産高」について、宮本は以下のように述べている。

土地生産力が上昇すれば、実収生産高と石高のギャップは時代が下るにつれ大きくなったと考えられている ([宮本-1988] p.47)

上の記述の後、宮本は、18世紀には「内包的な経済成長があった」(p.53)との判断を下している。[宮本-1988]における記述を考慮に入れるならば、耕地面積と人口の推移の比較から導

かれた岡崎による時期区分は、内容において再検討の必要がある。ただし、宮本によっても、18 世紀における“人口と耕地面積の停滞”は指摘されており、耕地面積と人口の推移を基礎にした時期区分のもとに考察が行われている。

[荒井-2004]においては、岡崎による時期区分が採用された。しかし一方で、宮本による「内包的な経済成長があった」との記述に依拠し、「内包的な経済成長」の存在を示す記述がいくつか示されている<sup>9)</sup>。それゆえ、[荒井-2004]において、[宮本-1988]による論は補強されている。

本論においても、[荒井-2004]においてなされた時期区分のもとに考察を行う。ただし、18 世紀を「停滞期」と位置づけるべきではないと考えるので、あらためて石井寛治による以下の記述を基礎に、区分を行うこととする。

小農自立がほぼ達成された寛文・延宝期(1661-80 年)は、諸藩の領域市場圏の確立と並行して三都を中心とする幕藩制の全国市場が確立した時期でもあった。([石井-1991] p.65)

近世中期に当る 18 世紀は、(中略)、実取石高は増大を続けており、後述する特産物生産の発展を考慮に入れれば、経済が発展し、平均的な生活水準が上昇したことは疑いないところであろう。(p.68)

19 世紀に入ると、従来の幕藩制的市場構造は、さまざまな動きから分裂=解体せしめられていった。諸藩は程度の差こそあれ、いずれも領内の国産奨励に力を注いでおり、そうした政策にも触発されつつ、地方ごとの経済発展がすすんだのが、19 世紀前半の特徴であった。(p.86)

上の記述の意味するところは、[荒井-2004]における時期区分・内容と、変わらない。それゆえ、本論における時期区分は [荒井-2004]における時期区分と同一なものとなる。しかし、本論における時期区分は、“岡崎による区分に修正を加えたもの”ではなく、石井による区分に依拠したものである。

以上の考察を踏まえ、本論においては、以下の区分により、プラン作成を行なうこととする。

- ・量的拡大期としての 17 世紀(基礎形成期としての 16 世紀をふくむ)
- ・内包期としての 18 世紀
- ・再拡大期としての 19 世紀(中盤までを主とする)

### 3.2 資本主義的生産の定義

本論 1.4.2 においては、『道徳感情論』に示される「野心」が、『国富論』に示される「資本の増加」へと通ずる過程を考察した。本節においては、今一度『国富論』の記述に立ち返り、資本主義的生産の定義づけを行なう。ただし、1.4.3 に示したように、アダム・スミス理論には、補足されるべき点が見受けられるので、今後補足されるべき余地は残される。

『国富論』によれば「分業が確立するとだれもが交換によって生活するようになるので、商業的社会が成立し、貨幣が発達する」(p.24)という。これら貨幣のうち、「人がそれから収入を期待する後者は資本とよばれる」(p.261)という。そして、「資本が先行的にますます多く蓄積されるのに比例してのみ、労働もますます細分化」(p.259)されることになる。結果として、以

下のような達成がなされる。

勤労の量は、すべての国において、それを用いる資本の増加とともに増加するばかりか、その増加の結果として、同一量の勤労から、はるかに多量の製品が生産される(同上)

「資本の増加」の結果として、はるかに多量の製品が生産されることになる。多量の製品の生産は、ほぼ同量の消費も伴うだろう。それゆえ、多量に生産された商品は、多くの人びとに行きわたるであろう。

上の記述をふまえ、本論においては、資本主義的生産を以下のように定義づける。

・資本の蓄積を基礎とする商品の大量生産

ただし、資本主義的生産の成立には、いくつかの前提と、成立に伴って生ずる結果が見られるので、以下の要件をつけ加える。

- ・市場が形成され、社会内全体における分業が達成されること。
- ・貨幣経済が発達していること。
- ・個人の資本の増加が、年生産物(「国民の資本」)の増加として明らかにされること。
- ・大量生産が、多くの人びとによる消費として、確認できること。

### 3.3 しょうゆ醸造業の有効性

本節においては、前節に示した資本主義的生産の定義および要件にそって、17-19世紀前半における日本経済のありようを考察する。この考察から、[荒井-2004]において展開過程が示されたしょうゆ醸造業の、教育内容としての有効性を検討する。

速水融は、17-19世紀前半における、市場と商品流通にかんして、以下のような見解を示している。

北海道や関東産の魚肥が、遠く中央市場の大坂に運ばれ、瀬戸内の棉作に用いられ、生産された綿製品が、関東や東北で販売される、という全国の商品流通のネットワークが形成されてくる。([速水-1988] p.10)

上の記述から、市場の形成と社会内における分業が、達成されていたことは明らかだろう。また佐々木潤之介は、17-19世紀前半における農業技術の発展にかんして、以下のような記述を行なっている。

肥料ではこれまでの自給肥料(緑肥・堆肥・焼灰・厩肥・尿尿等)に加えて、干鰯や油糟などの購入肥料が使われるようになった。農具でも、人力農具である鋤・鍬の分化がいちじるしく、備中鍬が普及し、また千歯扱や千斛通し(せんごくどおし—荒井)も発明され普及した。([佐々木-1970] p.129)

上の記述からは、購入肥料が用いられたこと、さまざまな農具が発明・普及されたことがわかる。購入肥料を使用するには、貨幣を所有していなければならない。それゆえ、農村においても貨幣が使用されていたことはあきらかである。また、さまざまな農具の発明・普及が、年貢米の収穫のみを目的としたものではないだろう。[西川・天野-1989]においては、「紅花、綿、藍、砂糖のような商品作物ないし農産加工品、さらに生糸、綿織物、酒・醤油、鉄製品のようなプロト工業品<sup>10)</sup>が多くなってくる」(p.174)とある。この記述からも、商品作物栽培を起点とした、農村における貨幣経済の浸透が示される。

[楫西・加藤・大島・大内-1975]においては、「農業生産力の発展は、剰余生産物を生み出したので、その商品化がまず進む」(p.5)との記述がなされている。“農業生産力を基礎とした商品経済の発展”という主張は、多くの経済史文献に見られるものである。たとえば、[新保・長谷川-1988]においては、農業生産力の発展が、数値によって、以下のように示される。

1697(元禄10)年に3063万石(100.0)であった実収石高(農業産出高)は、1830(天保元年)に3977万石(129.8)となり、1867(慶応3)年には4681万石(152.8)となって、1世紀半余の間に53%も増大した。(p.249)

上の記述からも、17-19世紀前半における「国民の資本」の増加は、確実に存在したと言えるだろう。ただし、[速水・鬼頭-1989]においては、「経済合理性を重んじる行動を人びとは選ぶようになり、経済社会化が進んだ」(p.314)との記述に続き、17-19世紀前半における徳川幕府下の日本経済が、以下のように位置づけられている。

経済社会化された農業社会、これが江戸時代の文明史的な位置である。(同上)

上の位置づけを見る限りにおいて、17-19世紀前半における、徳川幕府下の日本経済は、資本主義経済とはいえないであろう。すなわち、同時期において、資本主義的生産は、日本全国を覆い尽くすものとはいえない。しかし一方で、[新保・長谷川-1988]に「領国外市場を対象とする商品生産への展開のプロセスは、決して一様ではなく、多様であった」(p.258)とあるように、17-19世紀前半の日本における商品生産の展開は、業種により異なるはずである。これら業種の中から、資本の蓄積を基礎とした大量生産が達成され、消費という形で、一般に普及された商品が見つけられるならば、その商品の生産は資本主義的な生産といえるだろう。

18-19世紀前半の庶民生活を記した『守貞謾稿』においては、「特に食類に至りては、衣服等と異にして、貴賤貧富の差別なきがごとし」(p.208)との記述とともに、18世紀以前には見られ



図4：4代勝文斎作 押絵扁額「野田醤油醸造之圖」[1877] 野田市郷土博物館蔵

なかった多くの食物が列挙されている。この記述に従うならば、食物に関係する商品において、資本主義的生産が達成された可能性は高い。

荒居英次によれば、野田造醤油仲間の茂木佐平治家(後のキッコーマン)において、1863年に12,955石(約16万人分の年間使用量)のしょうゆが生産されたという([荒居-1959] p.104)。また、このようなしょうゆ醸造のありようを示す資料として、以下のような絵も現存している。

上の記述および資料を見るに、しょうゆ醸造業において、大量生産の行われたことは明らかである。また、『守貞謄稿』においては、「江戸は専ら鯉節だしに味醂酒を加へ、あるいは砂糖をもつてこれに代へ、醤油をもつて塩味を付くる」(p.208)との記述も見られる。巨大市場であった江戸および周辺地域においては、しょうゆの大量生産を、消費における一般への普及としてとらえられるだろう。

本節における考察から、しょうゆ醸造業は、資本主義的生産と位置づけられるだろう。

### 3.4 しょうゆ醸造業における生産と消費

本節においては、修士学位論文において作成した、次ページ表3を基礎に考察を行なう。考察の目的は、しょうゆ醸造業の展開を中心とした生産と消費の対応関係を、本論3.1における時期区分にそってまとめることである。

次ページ表3をみるに、本論3.1における時期区分(点線部分)に添う形で、それぞれの項目は対応していると結論づけられる。時期区分においてみられる生産のありようは、しょうゆ醸造業に反映されているといえるだろう。そして、各時期区分においてみられるしょうゆ醸造業のありようは、労働・技術や、しょうゆの消費を最も促進した食品と考えられるそばにおいても、明確に反映されている。

以下、次ページ表3を基礎に、生産と消費の内容を、時期区分にそくし概略する。本論における教育内容の対象とする時期は、17-19世紀前半であるが、この時期の前後にあたる16世紀および19世紀後半以降についても、概略を述べる。

#### ・16世紀における生産と消費

この時期、大名による領地支配のもとで、農業生産力が上昇した。この生産力上昇の基底には、沖積平野での栽培の開始という、米作における土木技術の進歩があった。また、綿作のはじまりにより、女性の衣料労働時間が大幅に短縮された。

この時期における経済発展は、京都や湯浅などの、都市を中心とした限定的なものであった。しかし、武士層の勢力増大にともない、貴族の庇護のもとで結成されていた座が、貴族の支配から独立した。その結果、絶対数において貴族を上回る武士が、座にとっての、新たな取り引き相手となった。この新たな取り引き相手の登場により、(京都や湯浅などの)都市における経済は発展した。しょうゆもまた、この時期みそから分化し、独立した調味料として商品化された。

#### ・17世紀における生産と消費

この時期、新田開発の増加にともない、石高は飛躍的に増加した。石高の増加は年貢米の増加を意味するから、年貢米の換金もまた不可欠となった。この換金をおもに担う集散市場となったのは、大坂であった。大坂がこのような集散市場となりえた背景には、畿内における米の消費がある。この時期、畿内においてはすでに、商品作物として、綿花や菜種が栽培されていた。すなわち、集散市場としての大坂の地位は、商品作物の栽培を行う農民によって、支えられて

いたといえる。

上記原料をもとにつくられた綿織物や油は、江戸へ運ばれた。これを「下りもの」という。参勤交代の行われた江戸は、消費都市として巨大化しつつあった。この巨大化の過程において、多くの「下りもの」が江戸へ運ばれたのである。「下りしょうゆ」もまた、そのひとつであった。

消費の内容に目を向ければ、この時期、振売りという形態での、「夜蕎麦売」がみられるようになった。「夜蕎麦売」登場には、製油業の発展による灯火の普及が不可欠である。

・ 18 世紀における生産と消費

この時期、耕地面積の増加が停滞する一方で、土地生産性は上昇した。この土地生産性の上昇の基底にあるのは、(新しい農具の使用といった)農業技術の発展や(鱒や鯀などの)金肥の使用であった。土地生産性の上昇分の多くは、商品作物として内包的な経済成長を担うこととなった。

商品作物の普及は、(17 世紀において)集散市場として勢力を誇った大坂の地位を、相対的に低下させた。しょうゆ醸造業においては、銚子や野田といった関東しょうゆが江戸において販路を拡大した。関東しょうゆの勢力拡大の基礎には、関東農村における生産力の増大があった。

しょうゆ醸造業においては、問屋商人による支配のもとにあっても、銚子しょうゆと野田しょうゆによる、江戸市場をめぐる争いは続けられた。関東しょうゆは、抑圧のもとにあっても、

表 3 : 時期区分と、生産と消費の対応

修士学位論文において作成されたもの

生産	しょうゆ醸造業	労働・技術	消費
農業生産の上昇 都市経済の発展	しょうゆの誕生	綿作による女性労働軽減	武士層を基礎とする 日本料理の確立
17世紀			
大坂を中心とする全国 市場の形成 …畿内の綿織物業 …畿内の製油業	下りしょうゆが江戸に 送られる	新田開発による石高の 増大 畿内における商品作物 の栽培…下りもの	巨大都市江戸の誕生  夜蕎麦売の登場
18世紀			
土地生産性の上昇によ る内包的成長 …農業余剰の発生 大坂の地位相対的に低下	関東しょうゆの江戸進 出…野田や銚子  下りしょうゆの減少	商品作物の広がり …農業技術の進歩 …魚肥の普及	江戸における外食店の増 加 新そばや年末のそば …そばがうどんを逆転
19世紀			
農村工業の展開 …地域市場取引増 大坂の地位低下	二層構造の形成 …農村市場の形成 野田の地位確立	農村工業の展開  マニュファクチュア	農村でのそば食 …料理書の普及 江戸に 4000 店のそば店 天ぷらそばの登場 …そば店での交流
19世紀中盤			
	二層構造の拡大再生産	近代工業化	肉食の普及 外食機会の増加

成長していたといえるだろう。この関東しょうゆの成長は、江戸における振売りや外食店の増加といった消費の増加にみてとれる。

江戸において、そばの消費がうどんの消費を逆転したのも、この時期であった。有名な産地のそばは、ブランド品と位置づけられた。また、新そばや年末のそばが人々に愛好された。「夜蕎麦売」においても、風鈴そばという新しい形態も現われた。これらそばは、すす払いのあとの慰労やおよばれといった形で、人の集まる席でしばしば食された。

後の天ぷらそばの具材となる、天ぷらが一般化したのもこの時期である。この一般化の基礎には、製油業の発達があった。また鰹節も、カピつけにより風味を増した一方で、江戸への流通経路が確立された。

#### ・19世紀の前半から中盤における生産と消費

この時期における特徴的な事柄は、農村工業の展開にともなう地域市場取引の増加である。この地域市場における取引の増加により、大坂の地位は再び低下した。しょうゆ醸造業においても、江戸市場における大坂の地位は低下した。また、野田しょうゆとの江戸市場をめぐる争いに敗れた銚子しょうゆの営業収益は、周辺農村への販売という形で、低下を免れた。都市を市場とする大醸造家と、農村を市場とする中小醸造家という二層構造が形成されていた。

「国民の資本」の増加に対応し、江戸において、飲食店は急増した。農村においても、料理書が普及し、ハレの日の食事に変化がみられるようになった。この時期、江戸には4000店のそば店が存在していた。産地ブランド品の数が増す一方で、そばの上に具をのせる種物も増加した。天ぷらそばも、種物のひとつであった。そば食の大衆化にともない、そば店での人々の交流もさかんになった。社会内分業の成果である天ぷらそばが大衆化し大量に供給された。

農村においては、ハレの日にそば食が行われるようになった。しょうゆ醸造業と同じく、この時期におけるそば食も「二層構造」を形成していたといえる。またこの時期、農村においては、料理書が普及した。

#### ・19世紀の中盤以降における生産と消費

しょうゆ醸造業においては、二層構造が拡大再生産された。大醸造家の中には、資本供給という点において、後の近代工業化につながる者もいた。また、消費においては、和食を基礎とした肉食が普及した。和食を基礎にする点において、肉食の普及は、しょうゆ醸造業における二層構造の拡大再生産に対応する。

また、外食機会の増大にともない、百貨店食堂のような店舗が大衆化された。このような外食機会の増大は、食生活におけるしょうゆの普及を、より広範囲において実現しただろう。

## おわりに

以上本論においては、授業プラン作成の基礎となることがらを述べた。筆者の次なる課題は、これら基礎をふまえた、授業プランの提示および実験授業の実施である。ただし、プラン作成や実験授業実施にかかわる考察の過程においても、1.4.3に述べたアダム・スミス理論における限界の克服と、2章に述べた先行研究(あるいは実践)のより広範な検討は、筆者にとって不可欠な研究課題である。

注

- 1) さらに [有本-1979] においては、「社会における人間の理解」にかんして、以下の記述がなされている。  
「社会における人間の理解とは、社会がどのように(文化・民族・国・地域・階級などといった点で—荒井)さまざまに異なることによって、人間が生きていく条件や、人間の生き方や、また人間自体がどのように異なるかという理解である。(中略)、同時に、さまざまな社会における人間の多様さを通じて貫かれている人間の共通性を読み取ることもできると思われる」(p.189)。
- 2) 遠山と同様な主張は、木全清博「歴史認識論形成ノート1 歴史認識の発達の視点」(『歴史地理教育』[1986・7])においても、「歴史学の成果に大きく依拠することで、歴史教育の歴史学への従属を危惧するのはあたらない」(p.82)との記述により、展開されている。
- 3) 第二篇の題名は「われわれが他の人びとの諸情念と諸意向を、かれらの諸目的にとって適合的なものとして、あるいは適合的でないものとして、是認または否認するさいの、感情について」である。
- 4) 第四篇の題名は「行為の適宜性に関する人類の判断にたいして、繁栄と逆境があたえる影響について、および、まえの状態にあるほうが、あとの状態にあるよりも、かれらの明確な是認がしやすいのはなぜか」である。
- 5) 第1章の題名は「悲哀にたいするわれわれの同感は、一般に、歓喜にたいするわれわれの同感よりも、いきいきとした感動であるのに、主要当事者によって感じられるものはげしさには、はるかにおよびないのがふつうであること」である。
- 6) 『道徳感情論』(水田洋訳 [1973] 筑摩書房)においては、「共感」との語は見られない。同書においては、この「共感」とほぼ同じ意味をあらわすと思われる語として、「同感(sympathyあるいはsympathize)」との語が用いられている。[内田-1971]においては『道徳感情論』(水田洋訳)における「同感」との語が「共感」として論がなされている一方で、[内田-1981]においては「同感」との言により論が展開されている。  
[内田-1981]によれば、「ミスでは(sympathyに相当する日本語は一荒井)共感でいい場合もありますが、同感でないとまずい場合も多くて、訳語に困るところです」(p.118)という。[内田-1981]における記述から察するに、「共感」および「同感」という両者は、「訳語」の問題として生じたものと考えられる。それゆえ、本論においては、上記両者は「sympathy」という同一の英語を示すものとして、以下の考察を進めるつもりである。混乱を避けるために、「共感」および「同感」の表現は、(考察の対象とする)それぞれの文献ごとと同じ表現を用いるが、(筆者個人の)見解を述べるにあたっては、『道徳感情論』(水田洋訳)を尊重し「同感」との表現を用いることとする。
- 7) 『国富論』においては、「他人にある種の取引を申し出るもの」(p.16)との限定がなされている。それゆえ、『国富論』における「仲間の助けをほとんどいつも必要としている」人間を考察するにあたっては、“ある種の取引を行なおうとする人間”を念頭におくべきだろう。
- 8) 歴教協日本前近代分科会においては、松本徹(北海道)による「高等学校における北海道史カリキュラム試案」([永瀬-1991・10 臨])報告以降、歴教協北海道支部による「北海道史」を基礎とした全体像の構築への、実践をふまえた試みがなされ続けている。
- 9) [荒井-2004]においては、速水融「概説 17-18 世紀」(『日本経済史 I 経済社会の成立 17-18 世紀』速水融・宮本又朗編 岩波書店 [1988])における「土地面積当りの生産量は、耕地利用頻度の増大、肥料の投与、深耕、労働集約度の増大によって、全国どこでもかなり上昇した」(p.39)や、小高煌之助「非農生産と資本形成」(『日本経済の 200 年』日本評論社 [1996])における「18 世紀半ば以降には、農業余剰が発生していた可能性が大きい」(p.372)などの記述の引用から、18 世紀における農業生産高の増大が示されている。
- 10) 『リーゲーズ英和辞典』によると「proto-」は「原始的」「最初の」などの意味を表すという。それゆえ、上における「プロト工業品」との語は、“原初的な工業品”と解釈するべきと思われる。

### 参 考 文 献

- ・羽仁五郎「歴史教育」(歴史教育者協議会・郷土教育全国連絡協議会共同編集『歴史地理教育』[1957・8])
- ・須田勝彦「人間の本質規定—教育学の出発点を探るためのメモ」(北海道大学大学院教育学研究科・教育方法学研究室編『教授学の探究 第21号』[2004])
- ・有本良彦「社会科学の教育の目標と課題」(『講座・日本の学力7 自然・社会』日本標準 [1979])
- ・遠山茂樹「歴史教育の前進のために」(歴史教育者協議会・郷土教育全国連絡協議会共同編集『歴史地理教育』[1965・4])
- ・荒井眞一「日本における資本主義的生産の成立をどう教えるか —しょうゆ醸造業に焦点をあてて—」(北海道大学大学院教育学研究科・教育方法学研究室編『教授学の探究 第21号』[2004])
- ・荒井眞一「歴史教育における『同感(共感)』の位置づけ」(北海道大学大学院教育学研究科・教育方法学研究室編『教授学の探究 第22号』[2005])
- ・荒井眞一「日本における資本主義的生産の成立をどう教えるか」(北海道大学大学院教育学研究科2004年度修士学位論文)
- ・高村泰雄「教授学研究の方法論的諸問題(1)」(『北海道大教育学部紀要』第19号 [1972])
- ・アダム・スミス『道徳感情論』水田洋訳 筑摩書房 [1973]
- ・アダム・スミス『国富論』大河内一男訳 中公文庫 [1978]
- 『内田義彦著作集 第3巻』岩波書店 [1988] より
  - ・「スミス『国富論』体系」(初出『経済学史講座 第1巻』有斐閣 [1964・5])
- 『内田義彦著作集 第4巻』岩波書店 [1989] より
  - ・内田義彦「スミス『国富論』」(初出『経済セミナー』[1957・5])
  - ・内田義彦『社会認識の歩み』(岩波書店 [1971])
  - ・内田義彦『資本論の世界』(岩波書店 [1966])
  - ・内田義彦『『資本論の世界』をめぐって』(初出 上記著作集)
- 『内田義彦著作集 第8巻』岩波書店 [1989] より
  - ・内田義彦『作品としての社会科学』[1981]
- ・カール・マルクス『資本論』第1巻(資本論翻訳委員会訳 新日本出版社 [1983])
- ・永瀬弘勝「<分科会報告> 日本前近代」(歴史教育者協議会・郷土教育全国連絡協議会共同編集『歴史地理教育』[1991・10 臨])
- ・和久田薫「宮津藩と農民(小6) —地域で『共感』と『しくみ』を深く学ぶ子どもたち—」(歴史教育者協議会・郷土教育全国連絡協議会共同編集『歴史地理教育』[1985・12 臨])
- ・西野護「<実践記録・小学校6年> 江戸時代の農民像をどう描くか」(歴史教育者協議会・郷土教育全国連絡協議会共同編集『歴史地理教育』[1988・6])
- ・糸乗政治「<小学校の授業> 6年『千歯こき』で変わった江戸時代の農民」(歴史教育者協議会・郷土教育全国連絡協議会共同編集『歴史地理教育』[1992・9])
- ・土産田真喜男「木綿の普及は生活をどのようにかえたのか」(歴史教育者協議会・郷土教育全国連絡協議会共同編集『歴史地理教育』[1992・3 臨])
- ・平井敦子「<中学校の授業・歴史> 蝦夷地産魚肥から近世日本を見る」(歴史教育者協議会・郷土教育全国連絡協議会共同編集『歴史地理教育』[1998・9])
- ・小島一仁「佐原住民の生活と文化 —地域の人々に語ってきた歴史—」(歴史教育者協議会・郷土教育全国連絡協議会共同編集『歴史地理教育』 [1979・10])
- ・尾河直太郎「生活文化から社会のしくみにせまる」(歴史教育者協議会・郷土教育全国連絡協議会共同編集『歴史地理教育』[1982・9])
- ・若杉温「利根川水運と醤油醸造」(歴史教育者協議会・郷土教育全国連絡協議会共同編集『歴史地理教育』[2001・2])

- ・若杉温「近世の食文化」(歴史教育者協議会・郷土教育全国連絡協議会共同編集『歴史地理教育』[2002・1])
- ・加藤公明「<分科会報告> 日本前近代」(歴史教育者協議会・郷土教育全国連絡協議会共同編集『歴史地理教育』[2000・10 臨])
- ・星村平和「歴史教育の新潮流と日本史教育」(『日本史教育に生きる感性と情緒』教育出版 [1989])
- ・河内雅雄「日本史教育の現状と課題」(『日本史教育に生きる感性と情緒』教育出版 [1989])
- ・篠田壽夫「江戸地廻り経済圏とヤマサ醤油」(『醤油醸造業史の研究』林玲子編吉川弘文館 [1989])
- ・林玲子「銚子醤油醸造業の開始と展開」(『醤油醸造業史の研究』林玲子編吉川弘文館 [1989])
- ・原田信男「木の実とハンバーガー 日本食生活史の試み」日本放送出版協会 [1995]
- ・岡崎哲二『江戸の市場経済』[1999] 講談社選書メチエ
- ・宮本又朗「概説 17-18 世紀」(『日本経済史 I 経済社会の成立 17-18 世紀』速水融・宮本又朗編 岩波書店 [1988])
- ・石井寛治『日本経済史』東京大学出版会 [1991]
- ・速水融「概説 17-18 世紀」(『日本経済史 I 経済社会の成立 17-18 世紀』速水融・宮本又朗編 岩波書店 [1988])
- ・佐々木潤之介「小商品生産の展開」(所収『日本経済史』永原慶二編 有斐閣双書 [1970])
- ・西川俊作・天野雅敏「諸藩の産業と経済政策」(『日本経済史 2 近代成長の胎動』新保博・齊藤修編 岩波書店 [1989])
- ・楫西光速・加藤俊彦・大島清・大内力『日本資本主義の成立 I』東京大学出版会 [1975]
- ・新保博・長谷川彰「商品生産・流通のダイナミックス」(『日本経済史 I 経済社会の成立 17-18 世紀』速水融・宮本又朗編 岩波書店 [1988])
- ・速水融・鬼頭宏「庶民の歴史民勢学」(『日本経済史 2 近代成長の胎動』新保博・齊藤修編 岩波書店 [1989])
- ・喜田川守貞著, 宇佐美英機校訂『近世風俗志(守貞謄稿)』岩波書店 [1996]
- ・荒居英次「銚子・野田の醤油醸造」(『日本産業史大系・関東地方篇』東京大学出版会 [1959])